

# 〔紹介〕

## 西田直敏著『日本文法の研究』

坂口 至

本書は、著者が昭和四十二年以来、講座、雑誌、辞典などに執筆された日本語文法の研究史および古典語の文法に関する論文を集めたもので、次のような章立てとなっている。

### 第一部 文法研究の展開

#### I 語分類の歴史

#### II 動詞とは何か

#### III 形容動詞について

### 第二部 古典語助詞の研究

#### I 助詞総説

#### II 接続助詞の研究

第一部は、日本文法論の伝統的問題である品詞論に関する論考で、Iは語の文法的性質による分類の歴史を、IIは動詞の定義・認定に関する考え方の歴史を、それぞれ古代から現代まで広く見渡したものの、IIIは品詞論のなかでも最も議論の

多い形容動詞の認定をめぐる問題について、近世以来の諸説を紹介し、考察を加えたものと言える。

これらの論文は、いずれも講座ものや概説色の濃い雑誌に載せられた関係から、全体としては、著者の主張が抑制された、穏やかな記述となっているが、例えばIでは、語の分類の時期区分として、「語分類前史」「語分類本史(第一期)」「第三期」が創設されて、今後の研究の指針となると思われるし、IIでは、動詞論を日本におけるそれと西欧におけるそれの対比という観点から考察する点が新鮮である。

また、紹介者のような、国語学史特に近世の文法研究に疎い者にとっては、従来の概説書の記述は取っ付きにくいものが多かったが、著者の記述は、整理が行き届いていて分かりやすく、大変有り難いものとなっている。

次に、第二部のIは、日本語の助詞のうち古代を中心に用

いられたものの全体像を、具体例を豊富に挙げて体系的に述べたもの、IIはそのうち特に接続助詞について、古代から近世までの主要なものを詳説したものである。中でもIIは、文法辞典の項目として執筆されたものであるが、ありきたりの概説とは違い、文献的事実の数量的提示、先行研究の紹介・評価が盛り込まれており、その辞典の他の執筆者に比べても、一段と力のこもった記述となっている。古代のものに比して、室町時代、江戸時代の項目の記述がやや淡白な感じがしないでもないが、それはむしろ今後の研究の方向を指し示すかのごとくである。

(平成五年三月発行、和泉書院、四一〇頁、一二、三六〇円)

(本学文学部)